

2021 December

12月号

春燈



安住敦の句

他意なくて花冷の手を預けしや

『歴日抄』 昭和四十年

「備間す」の前置があるので特定の人にあて作つたのだと思う。背景の分からないまま勝手に鑑賞した。ドラマを読む気がした。何気なく手を預けたのか。深い意味があつたのか。自惚れの様な、期待する様な、微妙な場面である。或いは一寸した出来事の後、もはや、わだかまりの無い手を預けた。とも想像してしまふ、十七文字のドラマの様である。

長谷川歌子

安住敦の句

松取りて柴門常にもどしけり

『柿の木坂雑唱』 昭和五十五年

歳神の依代として飾つた松飾を取り外している。「もどしけり」ではなく、「もどしけり」としたところに、多忙の師がつかの間の安らぎだった正月も終えて、常の生活に戻るのだという強い意図が感じられる。

西嶋あさ子氏著『俳人安住敦』によれば、師は多くを語らず、作品を黙って残す人であつたという。「風景の後ろに作者が居なければつまらない。」との師の箴言が想われる。

佐俣まささを

安立公彦



十六夜の人なき浜べ松と在り
 軽やかに荷船過ぎゆく葉月潮
 ふと足を停むる老輩曼珠沙華
 蚯蚓鳴く暗中模索てふひと日
 コスモスの彼方夕づく筑波山

燈下集



○ 木多芙美子

秋天や翼あるものひかり合ひ
 落つるとき露一閃にいのち籠め
 けふはけふの水車の零す秋の水
 いつもの道と違ふこの道秋の風
 月影や原野に還る一屋敷

○ 小張志げ

岩陰の魚は眠らず十三夜
 踏み入れて絶ゆることなき虫時雨
 空壕の闇の一隅昼の虫
 をさな子のシャボンの匂ひ涼あらた
 長寿祝ふ新藁の薦被り

○ 江草礼

秋深し壁に描かれしラストリーフ
 長き夜やゲームに心吸はるる子
 秋高し湖逆しまに森作る
 天高し鬘なびくゲート前
 秋霖や別れのげんこつ節くれて

○ 青柳雅子

秋霖に洗はれてゐる甃
 雲間より天使の梯子十字架祭
 行く秋の瀬音高まる滑川
 酸橋しぼる夫と思ひを異にして
 逗子葉山釣瓶落しの海と山

秋祭少女の帯の水浅葱

○ 岩永はるみ

いわしぐも家族の数の傘干され
決めかぬる一事の行方木の実降る
草紅葉犬の目にもの間はれけり
迷ひ子の昔にかへる花野かな

○ 林 紀夫

古井戸に滅びの声か桐一葉
名月や竹林風を結びけり
箱根路は霧の底なり鳥の声
残額の増ゆることなし鴟の贄
肌寒し意思の通はぬ機械文字

○ 栗原完爾

兜太なき秩父札所の唐辛子
わがことに近き米寿や生姜酒
かなぶんの綺羅を掃きだす独居かな
窓に揺るる庭木の影や敬老日
母がりの紫蘇の実を噛む夕べかな

○ 本多遊方

虫の音や匠は人を黙らす
濡れ縁のすこし濡れたる雨月かな
墓仕舞したる跡地の穴惑ひ
鴟の贄賞味期限の表示なし
山粧ふあらたな造語増えにけり

○ 武田巨子

子の願ひ言ひきれぬまま星流る
水底にゐる心地なり月見舟
朝空を映す池塘や露の宿
きはやかに鴟尾の跳ねたる秋の天
萩括りわが来し方も括りけり

○ 諸岡孝子

人知れぬ白をはぐくみ藤ばかり
雨音のまとも大きく名残の茶
金木犀むかし母校の外かはや
山茶花の結界ふかき子の忌日
いろほのか西王母椿の数となり

○ 小泉三枝

父の忌来約せるとく彼岸花
遠案山子声をかけたき夕まぐれ
秋夕焼富士は三角ビル四角
石榴の実裂けて四方に活断層
湖に綺羅を増やして蜻蛉群る

○ 菅澤陽子

秋澄むや竹人形の竹の艶
秋彼岸母のお萩の懐かしや
御簾越しに祝詞聞きある秋祭
身辺整理いそげ急げと残る虫
田の神の微笑み永遠に今日の月

○ 平野加代子

枝豆を喜寿の固さにゆでにけり
敬老日錠剤ポンと飛び出して
秋風や髪染め敵の数減らす
ニュース速報釣瓶落しをはやめけり
長き夜やLEDライト瞬かす

○ 長谷川歌子

軽やかに滑るカーテン秋の晴
天高し選手ひそかに十字切る
上り月よる咲く花の開き初む
柄杓の柄浄むる御手洗秋澄めり
山門の郵便受けや小鳥来る

○ 田嶋洋子

敬老日居心地悪き上座かな
秋茄子や目立たぬやうに生きし母
母と娘の話尽きなき葡萄かな
借りものにされたる父や運動会
とろろ汁二人の椀の古りにけり

○ 金山雅江

ガタゴトと軋む都電や震災日
長き夜や椅子にもたれし夫居らず
別の声遠くにひとつ芒原
湖の色俄に変はり秋日落つ
水音をききて爽やかひと日晴れ

○ 太田佳代子

時止まる真昼の庭や秋の蝶
一本は緋色放さず曼珠沙華
病み上がりの首のせてゆく秋の道
秋彼岸空を耕す鳥の群れ
後ろ手に結ぶエプロン台風期

○ 久保久子

腐葉土の匂ふ小径や赤とんぼ
木曾谷の棚田を統ぶる稲雀
命終のひかりを放ち子持鮎
虫籠は祖父の手造り通し土間
木槿閉づ今日一日を満ち足りて

○ 廖 運 藩

名月や翁微醺のだんちよね節
よぼよぼの發條時計夜長し
灯火親し汗牛充棟の積ん読書
啄木鳥や祖廟鎮守の巨木群
啄木鳥や深山の里の瘦伽藍

○ 久米憲子

文月や「父の詫び状」読み返す
名園の紫式部白式部
雛僧の所作美しく新豆腐
秋麗や風に乗り来るファンファーレ
夫の夢聞かず仕舞や後の月

○ 小倉陶女

鯨日和隣の魚籠を覗きけり
小鳥くる古き地名を頼りとし
露の世の口約束を信じけり
花野みち影のやさしきものばかり
藪からししぶとく居場所探しをり

○ 荒井 慈

かなかなや問はず語りの城の秘史
人待ち顔の公衆電話虫の闇
筆まめの白寿の母や新米来
雲ひとつなき奥つ城や曼珠沙華
十六夜や狛犬爪を磨きをり

○ 佐渡谷秀一

梨剥くや延長戦の甲子園(TV)
残る蟬悔いなく過ごせと鳴かれても
急かさる用事もたねど法師蟬
テレビよりラジオに馴染む夜長かな
小望月線香の束解きにけり

○ 三代川玲子

妹亡き窓に垂るるや青ぶどう
大花野飛天の如くパラシユート
秋桜川の向かうも秋桜
傾ぎ癖つきたる案山子又なほす
さやけしや行間匂ふ新刊書

○ 沼田桂子

曼珠沙華不意に咲く花空澄めり
万物の溶かされてゆく秋夕焼
三日月の胎児のごとく雲間より
漆黒の闇を研ぐかに虫の声
行く秋や吾の行方のさだまらず

○ 豊谷青峰

新豆腐大山詣の帰り道
金賞の口上添へて新走り
料亭を守る女将や菊膳
神楽坂の「新内通り」虫時雨
恙無く終はる仏事や月今宵

○ 宮田豊子

ムソルグスキー曲奏重し夜半の秋
花野恋ふ記憶の中の友いくたり
蕎麦の花白の群れ美し祖母の家
彼岸花好きとふ集ひ黙多く
秋蘭くる秘仏の噂山の寺

○ 高埜良子

鶏頭の色濃き朝や雨上がる
竜胆や甲斐に球形賽の神
碧天の借景みたす夢窓の忌
手のひらの香りと艶や今年米
豊の秋郷土料理のレシピかな

余言 安立公彦

新米を炊くよろこびの水加減

吉澤恵美子

今年も新米の季節となった。歳時記にもあるように、秋祭は新米の収穫祝いである。農村の風景が安らぎを与える。この句、その新米を今まさに炊飯器で炊いている景だ。「炊くよろこびの」が善い。炊き上がった今年米ではない。新米の白さが、炊くよろこびを祝っているような思いがする。作者は更に、その炊き上がる新米に、「水加減」を添える。更に一転して「水加減」は、作者の来し方を思い出させる。元よりそれは首肯の回想である。

爽やかに米寿の背筋正しけり

大室恵美子

「爽やか」には、すがすがしく快いさま、はつきりとしているさま、あざやかなさまの、三つの意味がある。何れを見てもまさに「爽やか」そのものである。

米寿は八十八歳を示す言葉。また八十八歳の賀の祝いという意味もある目出度い言葉である。この句は更に、「米

寿の背筋正しけり」とある。上五、下五は、まさに米寿を寿ぐ言葉と言えよう。加えて、この「正しけり」には、姿勢のみでなく、「心の姿勢」をも指すものと言えよう。

曼珠沙華いきなり咲いて見せにけり 太田 慶子

私の庭にも曼珠沙華がある。散歩の途次、畦に咲く花を二株貫つて植えたのが、今は十数本となり、毎年秋の彼岸になると、茎の頂部に六片の真紅の花を咲かせる。有毒植物。但し鱗茎は薬用とある。

この句を見ていると、曼珠沙華は自らの意志で花を咲かせていると見られ、またそういう不思議さを持つ花と見なされていると言えよう。しかし、花の名の死人花、幽霊花、捨子花の称は論外である。

山荘の古きオルガン霧流る

矢口 笑子

「山荘」と「古きオルガン」の取合せが、如何にも相応しい。この山荘は箱根か。辞書を見ると、山荘には、「箱根の〇」とあり、別荘には、「軽井沢の〇」とある。この句の場合には原句の通り、山荘が良く合う。

「古きオルガン」が善い。ピアノでは音が大きすぎる。弾き手は如何か。若い女性だと、ピアノの方が善い。山荘

にふさわしいのは、或る程度中高年の女性。それも「山荘」の持主にふさわしい、おどかな人柄の女性が善い。些か鑑賞が外れたが、それもこの句の魅力によるもの。

来世また父の娘に秋彼岸

藤原 若菜

この句を目にした人は、特に男性は、幾度も深く頷いたことだろう。娘さんのある父は元より、男子のみの父も、湧き出る思いを、暖かく記憶に留めたことと思う。

作者の父君は故人となられているのか。「来世また父の娘に」の思いは、父を思う娘と、その娘をいとおしむ父の様子を、あたたかく表わしている。こういう句を見ていると、俳句というものの持つ説得力を思う。同時に、俳句に使う言葉の選択の大切さも思うのだ。

水音に眠る一村星月夜

小山 繁子

この句を読む人それぞれが、古里に帰ったような思いに浸るだろう。私の生れ在所はこのような静謐な地ではない。しかしこの句を読むと、古里という思いが湧いて来る。

「水音に眠る一村」が、この村の景を遍く表わしている。農業に水は必須のもの。用水路の水音、終夜流れる水の音は、四辺の住民にとって、安らかに眠る子守唄のようなものであろう。「一村」が善い。「星月夜」が、佇まいを、安

らかに表わしている。

見慣れたる夫の書架ある良夜かな 西岡 啓子

作者の夫君は過日逝去された。「見慣れたる夫の書架」には、幾多の思い出があることだろう。またこの書架には夫君と作者に共通する回想が納まっているのだ。それはまたこの句を見る全ての人たちにも通う、夫婦の回想である。

この句はしかし、下五を「良夜かな」で締めている。この下五がこの句を、単なる回想から、夫君との思い出を、俳句という詩型に昇華していると言えよう。この「良夜」で、夫君への思いも鎮静化する。季語は一句の主柱である。

名月や女も寝酒ゆるされよ 永井 恵子

「寝酒」は冬の季語。暖房の無い頃の寒さを避ける意味の季語である。この句は「名月」があるので秋季となる。作者の住まいは宮崎。今宵の名月は、仰ぎ見る高千穂峰に架かっている。天孫降臨伝説の地である。頂上に「天の逆鉾」がある。この伝説は、今宵の名月を愈々際立てる。

寝酒は万人に通う。「ゆるされよ」とあるが、それは言うまでもないこと。この句、「名月」と「寝酒」との取合せが突飛のようで、善く合っている。更に「女も」で、その取合せに、一段の深みを感じる。

当月集

安立 公彦選



○ 辻 泰子

四分音符の水琴窟や秋の声
手のひらほどの傘を広げて茸生ふ
丸饅に秋天深く映りけり
切り口の立てる刺身や今年酒
礼状は夫と連名星月夜

○ 山口 地翠

○ 農野 憲一郎
駆けくだる熊野三神零余子飯
学童保育に残る一人や群れ秋津
残菊の茎の捻れをただしけり
虫の夜や祈るでもなく仏前に
蜻蛉睦む弁天様の水辺かな

○ 山口 地翠
姫路城の影あざやかに月涼し
秋の野をかきわけ走るローカル線
夕暮の無人の緑地小鳥来る
秋めくや新製品の「おーいお抹茶」
秋うらら甥とつれだつカレー店

○ 佐藤 まさ子

○ 山本 泰人

山深き寺の籬や真葛
鳴き交はず小鳥の群れや谷の木々
草叢に競うて鳴くや轡虫
文机に母の形見の秋扇
一通の友の葉書や鉦叩

ネクターの絞め方忘れ秋隣
母の字の日めくりありし秋彼岸
秋日差す柵田に人のいそしめり
秋天や富士ふところに友眠る
爽籟や大奥ありし江戸城址

春燈の句

安立 公彦選

爽籟や牧水歌碑の松林

神奈川 望月 郁江

柿一つころがつてゐる門の前

秋明菊ひと株残し刈られけり

零余子飯釜ごと下げて友来る

小流れの正しきリズム秋澄めり

曼殊沙華恋に溺れし日もありき

金メダル下ぐる案山子の笑顔かな

露草の露一粒の光鋭き

ほどほどに枯れて芒のかがやける

鯛や現世になほ鳴き足らず

門口を打つは秋風ばかりなり

夫の肩なづるかに落つ桐一葉

秋の夜や物語りめく友の声



さやけしや上毛三山背伸びして

つい今の事忘るるや鯛雲

天高し愛車買はれて去りにけり(運覧許証)

紫蘇の実をしごく手指を染むるかに

小望月有為の奥山照らしけり

金木犀暮しの隅に香りけり

やはらかき声のひびきや萩活けて

藤袴浅黄斑を待つてをり

掛け直す母の釦や秋彼岸

鯛雲非通知電話そのままに

水澄むや道端の供花あたらしき

白杖や道の応ふる秋の声

雨の稲架白くうかべる母郷かな
夢の中父母は壮健曼珠沙華

栃木 佐藤 忠

茨城 関 道子

埼玉 斉藤みちよ

群馬 小菅 澄重

京都 村上 國枝

兵庫 橋本貴美代

春星賞受賞作（20句）

梅雨時間

辻

泰子

羅の影濃く立ちぬ段葛

源氏池白旗のごと蓮咲きぬ

コロナ禍や蓮の蕾の合掌す

青鷺の賢者のごとき佇まひ

波音のかすかに聞こゆる茅の輪かな

神官につつき茅の輪をくぐりけり

青嵐百の赤絵馬鳴かせたり

参道を真つ直ぐ妊婦の夏帽子



かはせみや写真家集ふ日曜日

忘れ物取りに走るや炎天下

八百年の寺の山門雲の峰

開山の日蓮像の灼くるかな

比企一族の墓へ日傘をたたみけり

一族の墓傾かせほととぎす

雑音は聞きたくなしと曼陀羅華

梅雨晴間江の島までと言ふも旅

白南風や極彩色の弁天堂

夕立や巡回ポリスと雨宿り

呼込みの土産屋通り凌霄花

江の島の土産話に海月かな